



田中康夫

インタビュー

// 33年後 // その理由

2013年10月、驚くべきニュースが届いた。

1980年に発表された小説『なんとなく、クリスタル』の続編が雑誌「文藝」にて連載が開始されるといふのだ。

その名も「33年後のなんとなく、クリスタル」。

長野県知事や衆議院議員などを経て、

田中康夫はなぜ17年ぶりに小説を書こうと思ったのか――。

第2話が掲載された「文藝」の発売から1週間後の1月14日、帝国ホテルの会議室で話を訊いた。

取材・文・撮影 || 森田真規

協力 || 小林英治

『なんくり』の誕生

2013年10月7日発売の「文藝 2013年冬季号」に、その小説の第1回目が掲載された。田中康夫の17年ぶりの小説となる「33年後のなんとなく、クリスタル」だ。同年の2月に「なんとなく、クリティック」というリトルマガジンを創刊していた筆者にとつて、『なんとなく、クリスタル』の続編が書かれるとは思ってもよらぬ事件だった。しかもこの取材をオフアールした時、田中氏はすでに「なんとなく、クリティック」の存在を知っていて、創刊号を購入してくれていたのだ。

「たまたま『週刊金曜日』の書評で知ってすぐに、なんと日本での消費税の支払いを回避している無国籍企業のAmazonで買ったんですね（涙）。で、森田さんが書かれた巻頭の文章（『サブカル』の終わりと批評の始まり）を読んで、

こりやすごいと感銘を受けました。『クリスタル』つて無色透明で光を素直に受け入れるけど、そのまま垂直に無批判に通すわけではない。と
いつて、いわゆる「屈折」という粗探しとも違う。その意味では『なんとなく、クリティック1』表紙の東京タワーの写真も、こうした感覚を漂わせるカツティングになっていて、秀逸だなあと思いました」

33年前に発表された小説のタイトルをもじった雑誌名を筆者が付けたのは、80年代カルチャーを経験し損ねたからこそその憧れがあり、その時代の雰囲気をもかたちにした小説が『なんとなく、クリスタル』であると思っていたからだ。

大学生でモデル、そしてミュージシャンの彼氏と一緒に青山に住む主人公・由利をはじめとしたこの小説の登場人物たちは、高度消費社会に突入していた1980年・東京で「なんと

く気分の良い生活”を送ることを行動原理にしていた、ように思う。例えば、『なんとなく、クリスタル』にはこんな言葉が出てくる。

「クリスタルか……。ねえ、今思ったんだけどさ、僕らつて、青春とはなにか！ 恋愛とはなにか！ なんて、哲学少年みたいに考えたことつてないじゃない？ 本もあんまし読んでないし、バカみたいになつて一つのこと熱中することもないと思わない？ でも、頭の中は空っぽでもないし、曇つてもいないよね。醒め切っているわけでもないし、湿つた感じじやもちろんないし。それに、人の意見をそのまま鵜呑みにするほど、単純でもないしさ」

「恋愛とは？」「青春とは？」「人生とは？」、この小説に登場する若者たちはそんな問いとは無縁に、「記号の集積」と化した東京での生活を謳歌している。この小説に登場する人物たち

に、具体的なモデルはいたのだろうか？

「なんとなく、こういう人がいるんじゃないか、我々の回りにはいっぱい、そう思つて書いたんですね。僕よりも上の世代の学生運動の時代とは違つて、ちよつと小綺麗な格好をしていて、ディスクを——今はクラブと言うのでしょうか——貸し切つてパーティーを開いたり、あるいは、精神主義な体育会ではないテニスのサークルがあつたり。現実に『なんくり』で登場するような人たちが街にいるのに、そうした若者には中身がないとか文学として描くに値しないとか小馬鹿にして、彼らや彼女らを描いた文学作品が生まれないのは、文学の敗北とまでは言わないけど、文学の怠慢ではないかな、と思つていたんです。街には今までの文学が描いてきた学生像とか青年像とは違う人たちであふれているのに、なぜそれを描かないのかなつて。でも、自分で書くのはかつたらしいし、それよりも

デートをしていた方がいいと思つてました(笑)。そんな時、就職も決まつてあとは卒業を迎えるだけつて時に大学を停学になつてしまつて。留年で時間ができたから、『なんくり』を書いたのです」

“33年後”のきっかけ

「33年後のなんとなく、クリスタル」は、『ヤスコ』なる人物が語り手となつている。彼が33年前に発表した小説は事実を元に書かれたものだった、という設定で、その小説の主人公であつた由利をはじめとする『旧友』たちと偶然再会したヤスコが、長野県知事時代の逸話など、自らの過去を振り返りつつ物語が進んでいく。

「田中康夫の私小説かよと思つて読んでいた人が、連載2回目を読んだらちよつと違つと勘付き始めたかも知れませぬ。でも、(連載2回目

で描かれた)40、50代の女性が集う女子会に実際に僕が出たんだと相変わらず思つている人もいて、『会話が良く描けている』つて言われたり(笑)。「なんくり」の時と同じように、登場人物の会話や心理は全部、書き手である僕の頭の中で回転しているのに」

そしてこの小説を書くことになつたのも、『なんとなく、クリスタル』の時と似た状況に置かれたことがきっかけとなつていたようだ。

「『文藝』の編集長に以前から、創刊80周年&文藝賞50回目が重なる『2013年冬季号』では『ぜひ、書いて欲しい』と言われていて。文藝賞の選考委員の時期(08〜09年)にも言われていたのですけど、(長野県)知事を経て国会議員になり、当時はとても小説の世界に入つていける雰囲気ではなかつたんです。幸か不幸か2012年12月の総選挙で敗退して(苦

笑)、物理的にも精神的にも余裕が生まれたこととで、今のこの状況なら書けるかなって。編集者と相談していく中で、『33年後のなんとなく、クリスタル』という作品名に決まったんです。キャッチーとも微妙に違う、ある意味では随分とストレートなタイトルですけど、食わず嫌いで『なんとなく、クリスタル』を33年前から「誤読」し続けていた人たちが、実は単なるブランド小説、カタログ小説だと嘲笑していた自分たちの方が洞察力がなかったのかな、と焦ってもらえるようなものを書ければと思います。まあ、古いOSから転換できない人たちでしょうから、このタイトルに過剰反応して、またやぶにらみするかも知れませんが(爆)」

『なんとなく、クリスタル』という小説の大きな特徴に、文中に登場する店やブランド、音楽などについて膨大な注(NOTES)が付いていることが挙げられる。その数、442個にも

のぼる。そして、「戦後のニッポンの小説の中でも傑出したものだ」とこの小説を評価する小説家で文芸評論家の高橋源一郎の表現を借りれば、「まるで放り出されるように、「人口問題審議会『出生力動向に関する特別委員会報告』」と「五十四年度厚生行政年次報告書(五十五年版厚生白書)」が置かれ」、日本の人口減少と少子高齢化社会の到来の予想、厚生年金保険料アップなどを示したデータが巻末に付けられている。しかし当時、『なんとなく、クリスタル』を理解する上で重要なこの2つの「注」について、指摘されることはほとんどなかったそうだ。

「単行本の出版後にワシントン・ポストとシドニー・モーニング・ヘラルドの記者は、最後の2つのデータを加えた意味を質問してきたけど、日本のメディアは新聞もテレビも雑誌も皆無でしたね(涙)。最初からビジュアルにリアルに見えていた巻末の注なんだから、仮にデイスるに

しても、本文の中で描き切れずにデータだけ唐突に載せたのか、くらは言って欲しかったけどね（笑）。33年経ってゲンちゃん（高橋源一郎）が指摘したら、『あゝ、私も気付いてましたよ』とシレッツと言い出す文芸記者や評論家もいるんだから、いやあ、ビックリだよ』

マルクスと岡崎京子

高橋氏が2013年に文庫版が新装された際に、巻末の解説で指摘した2つの注についての文章とは次のようなものだ。

『なんとなく、クリスタル』は、社会が異様な繁栄へ向かいつつあるその瞬間に、まるで悪夢のような光景を一瞬、垣間見せた。だが、人びとは、その映像には気づかなかつた。著者の田中康夫だけが提出することのできた、世界の荒涼たる未来の風景を見なかつたことにした。

この小説が持つている、もつとも恐ろしい、幻視する力には気づかぬふりをしたのだ』

さらに、「1980年代でもつとも優れた小説である、と考えてきた。『優れた小説のひとつ』ではなく、たつたひとつを選ぶとしたら、それ以外に考えられないという意味での『優れた小説』だ」（『文学界 2013年12月号』）と『なんとなく、クリスタル』を評した高橋氏。前述の文庫版解説で彼は、ある意外な人物をこの小説の補助線として引いてみせた。あのカー・マルクスだ。

「これほど深く、徹底的に、資本主義社会と対峙した小説を、ぼくは知らない。マルクスが生き延びていたら、彼が『資本論』の次に書いたのは、『なんとなく、クリスタル』のような小説ではなかつたらうか』

筆者が『なんとなく、クリスタル』を読んで似た感触を抱いた作品に、岡崎京子『東京ガールズブルーボー』がある。『なんとなく、クリスタル』の発表から10年後の1990年に連載が開始されたこのマンガも、80年代の東京を舞台に、田中康夫が描いたものとは違うスタイルを持った若者たちの青春を『記録』していた。ちなみに、このマンガの最後のコマには、「みんな、口をそろえて／『80年代は何も無かった』ってゆう／何も起こらなかつた時代／でもあたしには……』というセリフが記されている。岡崎氏と直接会って話したことはないと言う田中氏だが、意外な接点があつたようだ。

「実は羽田・伊丹便の機内で隣席だつた女性が岡崎さんの妹さんだと判つて、『姉があなたの作品を読んでる』『僕も岡崎さんの作品を読んでる』と。『じゃあ、1度会いましょう』つて話になつたんです。でも、ああいう事故に遭

われてしまつて……（1996年に交通事故で重傷を負い、それ以降岡崎氏は休筆中）。今、彼女が快復されたら、どんな世界を描くのか知りたいですね。岡崎さんのマンガを読み直すと、『pink』をはじめ、改めて舌を巻いてしまいます。映画化された『ヘルタースケルター』も、『なんくり』が本来描いている『悲しさ』を表現していましたね。文章もすごいし、彼女は大変な人だと思います」

“その先”へ

『なんとなく、クリスタル』から約10年、1991年に刊行された『サースティ』という小説のあとがきで田中氏は、「恋愛も、仕事も、結婚も。充たされているのに、どこか哀しい。こうしたサースティな心を描いてみたい。ずうつと、そういう気持ちを抱き続けてきた」と書いています。バブル経済が頂点を迎え、崩壊す

る直前にこの小説は書かれていた。田中氏はこの小説について、自身が打ち立てた「スタイリング化現象」という概念を用いてこう説明する。

「ひもじいからご飯を食べる、寒いから服を着るっていう第一義的な目的から、より美味しいものとか、有害物質が入っていないものとか、有名デザイナーの洋服だとか、第二義、第三義的な目的に重きを置く社会になつていた。ただ単に食べる、着るといふことの次の段階を求めるところを「スタイリング化現象」という言葉で表現しました。そして「サーステイ」とは喉が渴いている、という意味ですよ。でも、ハングリーで喉が渴いているわけではない。一方的に流されているのではなく、自身で選択できる消費への欲望、ということなんです。『なんくり』を書いた前後から特にその傾向は強くなつていて、ただ単にものを売るだけではない「広告」の存在が大きくなつたのと時代と軌を

一にしています」

『サーステイ』が書かれた90年代初頭から20年以上の時を経た現在では、日本社会も大きく変わつていった。鋭い社会批評としての小説を残してきた田中氏が現在の状況をひと言で表現するとしたら、どのような言葉になるのだろうか。

「『クリスタル』とか『サーステイ』みたいな言葉で今の社会を表現するのなら……、難しいですね。社会全体としては『イントララント (intolerant)』。『不寛容であつたり、アロガント (arrogant)』。『傲慢であつたり、それから』グリード (Greed)』。『強欲と言えるかもしれない。新自由主義経済という国境や文化や伝統を飛び越えてしまう無国籍経済の中で、一人ひとり『商品集積』の歯車として消費されていく社会。その中で人々の間に不寛容な空気が醸成されて、ある時に針が一方に振り切つてしまう、そうし

た雰囲気の兆候は感じますね。でも、恐らく人間や歴史は一旦、針が一方に振れないと、自浄作用も働かないのかもしれないですし」

「3回から4回の連載で400枚くらいになる予定」と取材時点では話していた「33年後のなんとなく、クリスタル」。『なんとなく、クリスタル』がそうであったように、田中氏はこの小説を書くことで、今の時代の「その先」を描こうと考えているのだろう。

「『なんくり』で描写し予見したのとも違う、

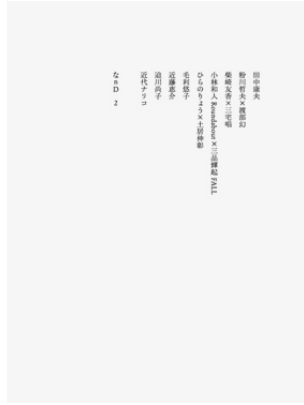
今とその先の社会が描けたら、と思っっています。有り体の言葉で言えば、歴史上類を見ない超少子・超高齢社会ニッポンの行方ってことでしょうか。あるいは昨年、『広告批評』の天野祐吉氏が亡くなり、セゾングループを率いた堤清二氏も亡くなり、これまでの消費社会から世の中がどう変わり、その変化の中で人はどう生きていくのか？ そういうことも結果的に示せれば、とも思っています。『33年後』も30年くらい経つてから、(時代の変容が)見えていた、と言われるようなものになれば本望です。自分に力がないのを横に置いて、生意気を言えばね(笑)」

田中康夫(たなかやすお)

1956年生まれ、東京都出身。80年、一橋大学在学中に執筆した『なんとなく、クリスタル』で文藝賞を受賞し、小説家デビュー。ベストセラーとなった同書は映画化もされ、社会現象となった。『プリリアントな午後』『昔みたい』『サーステイ』『オン・ハッピーネス』などの小説の他、『フアディッシュユ考現学』『東京ベログリ日記』などのエッセイも数多く執筆。00年から06年まで長野県知事を務め、05年には新党日本を立ち上げ代表となる。その後、参議院議員、衆議院議員を務める。現在、『文藝』にて17年ぶりの小説「33年後のなんとなく、クリスタル」を連載中。



なんとなく、クリティック 1



なnD 2

*書影をクリックするとオンラインショップが開きます

田中康夫インタビュー 『33年後』その理由 (取材・文・撮影=森田真規)

田中康夫『33年後のなんとなく、クリスタル』(河出書房新社)の発売を記念し、
雑誌「なnD 2」よりインタビュー記事のみ抜粋。

